



対人恐怖における認知の偏りの内容特定性について ： 敵意帰属との関連から

相澤， 直樹

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 8(1):103-106

(Issue Date)

2014-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008561>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008561>



対人恐怖における認知の偏りの内容特定性について

—— 敵意帰属との関連から ——

Content-specific interpretation bias in social anxiety:
On relation to hostile attribution

相 澤 直 樹 *

Naoki AIZAWA*

要約：本研究では、敵意帰属との関連で対人恐怖における認知判断特性の内容特定性を検討した。一般大学生男女329名による質問紙調査への協力を得て、対人恐怖の傾向、ならびに、対人場面において“他者に嫌われた”“他者に避けられた”と認知しやすい傾向である嫌悪判断と、対人場面における何らかの損害を他者の意図によるものと認知しやすい傾向である敵意帰属とを測定した。分析の結果、嫌悪判断と敵意帰属との間に弱い正の相関がみられるとともに、対人恐怖の傾向の各下位尺度得点を目的変数、嫌悪判断と敵意帰属の各得点を説明変数とする重回帰分析の結果、嫌悪判断・不安のみが対人恐怖の傾向に正の効果を持つことが示された。以上の結果は、対人恐怖における認知特性の内容特定性を支持する結果であると考えられた。

キーワード：対人恐怖、対人不安、嫌悪判断、敵意帰属、青年期

I. 問題と目的

対人恐怖は、わが国の精神・心理臨床の黎明期から研究されてきた精神疾患である。また、思春期青年期に一時的に高まる対人恐怖症に近い悩みは、対人恐怖の傾向や対人恐怖の心性と呼ばれ、広く発達の観点から研究がなされてきた(福井, 2007)。一方、近年欧米において、同様の訴えが社交不安障害(social anxiety disorder)として注目されるようになった(笠原, 2005)。社交不安の研究は、認知行動療法との関連で進展してきたこともあり、その認知的側面を重視する傾向にある(丹野, 2001)。

対人不安(social anxiety)¹については、すでにいくつかの認知行動モデルが提唱されている(井上, 2011)。それらのモデルは、おもに社会的状況とその認知、それに伴う身体反応を含む感情、行動要因により構成される。その中で、対人不安を生み出し維持するものとして、対人場面の認知の特徴に関心が向けられている(Hirsch & Clark, 2004)。対人不安の強い人が対人場面における他者の意図や行動を否定的で脅威的なものと認知しやすいことが指摘されている。

以上の関連は、すでに多くの調査研究により支持されている。社交不安障害を対象とした臨床研究においても、対人不安の研究においても、ほぼ一貫した結果が得られている(Miers, Blöte, Bögels, & Westenberg, 2008)。さらに、主な研究は、対人不安が強い人が、一般の人々や他の不安障害の人々と比較すると、対人

場面に関しては有意に否定的な認知を示すものの、それ以外の場面について差を示さないことを報告している(Amin, Foa, & Coles, 1998; Voncken, Bögels, & de Vries, 2003)。以上の結果は、特定の精神疾患がそれに対応する内容の認知の偏りにより弁別されるとする認知の内容特定性仮説(cognitive content-specificity hypothesis; Beck, 1976)に対応するものである。

しかしながら、現在、対人不安に特有の認知特性は、“対人場면을否定的で脅威的なものと認知する”と比較的広く定義されている。そのため、実際上そこには多種多様な対人場面における否定的な認知や解釈のあり方が含まれることとなる。たとえば、他者に嫌われたり避けられたと認知すること、侮辱されたり嫌がらせをされたとみなすこと、さらには、襲われたり狙われたと思いつくことなどが挙げられる。したがって、そのような否定的な認知全般が対人不安と関連があるのか、あるいは、その中でも何らかの特定の認知内容のみが関連するののかといった疑問が生じてくる。

対人場面での出来事は、実際には多様な解釈の余地を残すものが多く、そこに認知判断の偏りが生じる可能性があることが知られている。その中で、相澤(2011)は、従来攻撃性との関連で広く研究されてきた敵意帰属(hostile attribution)を取り上げるとともに、それとは異なる嫌悪判断という認知様式を論じている。嫌悪判断とは、“何らかのかたちで他者とのつながりが断たれるような場面(対人疎外場面と呼ぶ)”において“他者に嫌われた”や

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2014年4月1日 受付)
(2014年7月10日 受理)

“他者に避けられた”と認知しやすい傾向を指す。相澤（2011）は、場面想定法（hypothesized situation method）を用いた敵意帰属と嫌悪判断の測定法を作成し、両者の間に弱い正の相関を検証するとともに、攻撃性、公的自意識、相互作用不安との関連で弁別可能であることを示している。以上の研究は、対人場面における否定的な認知判断として敵意帰属と嫌悪判断の少なくとも二つがみられることを示唆している。

対人不安の特徴は、対人場面において軽蔑されたり嫌われたりすることを過度に恐れることにある。このことを考慮すると、従来対人不安との関連が繰り返し検証されてきた対人場面における否定的な認知判断は嫌悪判断の方ではないかと推測される。したがって、対人不安の認知判断傾向に内容的な特定性がみられるのであれば、嫌悪判断とのみ関連を示し、敵意帰属とは関連が見られないことが仮定される。

社交不安障害、ないしは、対人不安と、わが国で従来注目されてきた対人恐怖症や対人恐怖との異同については、今日においても議論が続けられている。その中で、対人恐怖の軽症例については、社交不安障害や対人不安とほぼ同一といった知見も示されているが（笠原，2005）、この点を実証する研究は未だに不足している現状にある。しかしながら、両者の特徴が非常に近似しているのは確かであり、社交不安障害、ないしは、対人不安で示されてきた上記の認知の特徴は対人恐怖にも十分に当てはまる可能性がある。また、社交不安障害や対人不安と同様に、対人恐怖における対人場面の認知の偏りの特徴を検討することは、その疾患の臨床理解や治療方策に有意義な知見をもたらすものと考えられる。そこで、本研究では、青年期の対人恐怖の傾向を対象に、それと嫌悪判断、ならびに、敵意帰属の関連を検討する。

II. 方法

1. 調査協力者と期間

調査協力者は、関西圏の4年制大学に在籍する大学生329名（男性150名女性179名、平均年齢 19.78 ± 0.93 歳）であった。すべて大学の講義の際に質問紙を配布し、その場で回収した。調査期間は、2012年1月から3月であった。実施にあたっては、調査の目的、匿名性、参加の任意性、質問紙の管理方法等について説明し、同意を得られる場合にのみ回答をするように求めた。なお、本研究は神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た。

2. 質問紙の構成

質問紙には以下の心理尺度が含まれた。（1）嫌悪判断と敵意帰属の測定については、場面想定法による対人葛藤場面における他者の意図の判断測定法（相澤，2011）を用いた。この尺度は、嫌悪判断が出現しやすい対人疎外場面3場面（電車内で隣席の人が席を立つ、自己紹介の最中に前の人が教室から出ていく、道端に屯する若者たちから笑い声が聞こえる）、敵意帰属が生じやすい対人挑発場面3場面（繁華街で見知らぬ男性の肩がぶつかる、あるグループに教室の明りを消される、雨の中タクシーに乗せてもらえない）を調査協力者に示し、そのような出来事が自分自身に実際に生じたと想定させる。そのうえで、前者については、その出来事を他者の嫌悪によるとみなす嫌悪判断項目、ならびに、偶然

Table 1 意図判断測定法各得点の平均値と標準偏差

	平均	標準偏差
嫌悪判断	10.04	3.78
非嫌悪判断	14.90	2.98
不安	11.30	4.13
敵意帰属	11.59	3.49
非敵意帰属	13.50	3.20
怒り	15.94	2.94

や外的状況によるとみなす非嫌悪判断項目について「1. 全くそう思わない～7. きっとそうだと思う」の7段階評定、また、不安について「1. 全く感じない～7. 非常に強く感じる」の7段階評定で回答を求める。後者については、その出来事を他者の敵意によるとみなす敵意帰属項目、ならびに、偶然や外的状況によるとみなす非敵意帰属項目について「1. 全くそう思わない～7. きっとそうだと思う」の7段階評定、また、怒りについて「1. 全く感じない～7. 非常に強く感じる」の7段階評定で回答を求めるものである。この尺度は、攻撃性や公的自意識、相互作用不安との関連で妥当性が支持されている（相澤，2011）。（2）対人恐怖の傾向の測定については、相澤（2002）による自己愛的人格項目群を用いた。この尺度は、対人恐怖の傾向を測定する3下位尺度（対人過敏、自己萎縮感、対人違和感）、自己愛の傾向を測定する4下位尺度（自己誇大感、賞賛願望、権威的操作、自己愛憤怒）で構成され、前者の3下位尺度を分析に用いた。これらは、田中・穂苅・福田・小川（1994）と相澤（1997）の対人恐怖の傾向尺度を参考に作成されたもので、YG性格検査法の10下位尺度との関連で妥当性を支持する結果が得られている（相澤，2002）。また、同項目群の短縮版において、対人恐怖心性尺度（堀井，1996）との間で妥当性を支持する結果が得られている（相澤，2009）。

III. 結果

1. 嫌悪判断と敵意帰属の相関

対人疎外場面3場面の嫌悪判断項目、非嫌悪判断項目、不安項目の得点をそれぞれ合計し、嫌悪判断得点、非嫌悪判断得点、不安得点とした。その後、各得点間の相関係数を算出したところ、嫌悪判断得点と不安得点との間で.789と非常に強い正の相関がみられたため、両者を合計して嫌悪判断・不安得点とした。また、対人挑発場面3場面についても、各3場面の敵意帰属項目、非敵意帰属項目、怒り項目をそれぞれ合計し、敵意帰属得点、非敵意帰属得点、怒り得点とした（Table1）。両者の相関係数を算出したところ、嫌悪判断・不安と敵意帰属、非嫌悪判断と非敵意帰属の間で弱い正の相関を示す結果が得られるとともに、嫌悪判断・不安得点と非敵意帰属得点の間に弱い負の相関がみられた（Table 2）。

2. 対人恐怖の傾向との関連

先行研究（相澤，2002）にしたがい、対人恐怖の傾向に対応する3下位尺度の得点を計算した。意図判断測定法の各得点間に相関がみられたことから、対人恐怖の傾向の各下位尺度得点を目的変数、場面想定法各得点を説明変数とする重回帰分析を実施した（Table 3）。いずれの場合も有意な決定係数が得られるとともに、嫌悪判断・不安からの標準偏回帰係数のみが有意となった。また、その値は、対人過敏に対しては中程度の強さの正の効果を示唆す

Table 2 嫌悪判断各得点と敵意帰属各得点の相関係数

	敵意帰属	非敵意帰属	怒り
嫌悪判断・不安	.287**	-.130*	.140*
非嫌悪判断	-.271**	.331**	-.017

**p<.01, *p<.05

Table 3 重回帰分析の結果

説明変数	目的変数	非敵意帰属	怒り
	対人過敏	対人違和感	自己萎縮感
嫌悪判断・不安	.492**	.305**	.292**
非嫌悪判断	-.004	-.041	-.037
敵意帰属	-.024	.037	.076
非敵意帰属	-.009	.079	.103
怒り	.047	-.003	-.016
調整済み R^2	.247**	.104**	.099**
F	26.520	20.116	18.921

**p<.01

るものとなり、対人違和感と自己萎縮感に対しては弱い正の効果を示唆するものとなった。

IV. 考察

本研究では、対人恐怖の対人場面における認知の特徴を検討するため、対人恐怖の傾向と対人場面における2つの否定的な認知判断傾向、すなわち、嫌悪判断と敵意帰属との関係を検討した。その結果、仮説のとおり嫌悪判断が対人恐怖の傾向に対して正の効果を示したのに対して、敵意帰属は有意な効果を示さなかった。以上の結果は、対人恐怖の傾向が、対人場面における否定的な認知特性の中でも“他者から嫌われる”や“他者から避けられる”という内容の認知に特に関連することを示唆している。

今回の研究では、対人疎外場面における各得点のうち、嫌悪判断得点と不安得点がきわめて高い正の相関を示した。以上の結果は、対人場面における嫌悪判断と不安感との間に高度の共通性がみられることを示唆している。いくつかの先行研究は、対人不安の強い人が対人場面において事前に否定的な出来事が生じる可能性を高く予想するとともに、事後にはその体験を反芻する傾向にあることを示している (Hofmann, 2007)。本研究の結果は、そのような予期的な不安体験や事後の否定的な体験へのとらわれと嫌悪判断がほぼ一体といえるほどの密接な関係にあることを示唆している。

また、対人恐怖の主な臨床上的特徴からも、対人恐怖の傾向と嫌悪判断との間に正の関連がみられたことはきわめて妥当な結果といえる。また、下位尺度の中で、対人過敏に対する関連が最も強く、対人違和感や自己萎縮感との関連はそれより弱いものにとどまった。対人過敏は、他者からの評価や視線を気にする傾向や、他者から悪く評価されたのではないかと不安に思う傾向の項目からなる。それに対して、対人違和感、対人場面で自然にふるまえなかったり、集団になじめなかったりする体験、自己萎縮感、自分自身を内気で引っ込み思案とみなす傾向を問う質問項目からなる (相澤, 2002)。以上のような下位尺度の中で、嫌悪判断は最も直接的に対人過敏に関連すると予測される。したがって、前述

のような相関係数の程度の差異は妥当なものであると考えられる。

一方で、敵意帰属と対人恐怖の間にはほとんど関連は見られなかった。敵意帰属は、対人場面におけるトラブルを他者の敵意に帰属しやすい傾向を指す (Crick & Dodge, 1994)。したがって、広義には対人場면을否定的で脅威的なものとみる認知判断特性に含まれる。しかしながら、従来この敵意帰属は、他者に対する報復的な攻撃的行動 (Crick & Dodge, 1994) や迫害妄想、パラノイア傾向との関連 (Combs, Penn, Michael, Basso, Wiedeman, Siebenmorgan, Tiegreen, & Chapman, 2009) が示されてきた。その意味では、敵意帰属は、自己ではなく他者を否定的な存在として評価することに特に関連があるといえる。一方で、対人恐怖は、対人場面において自分自身が否定的で劣ったものと評価されることを恐れることに主な特徴がある。以上のような認知パターンの違いから、敵意帰属は対人恐怖の傾向に積極的な効果を示さなかったものと考えられる。

同時に、本研究では、嫌悪判断と敵意帰属との間に弱いながらも正の相関関係がみられた。このことは、両者が対人場면을否定的に認知するという広義での類似性をもつことによるのかもしれない。ただし、対人恐怖と敵意帰属に関する先行研究は、両者がともに内面的な感情や枠組み (スキーマ) により相手の意図を判断し、外的な情報に目をむけない傾向と関連があることを示唆している (Dodge & Newman, 1981; Mansell, Clark, & Ehlers, 2003)。直接的な感情や内面的な思いのみで判断すること、ならびに、それと他者の意図を合一的に体験することは、多様な臨床症状に関連する重要な要因であるとの指摘もなされている (辻, 2008)。上記の関連は、そのような認知構造上の共通性を反映する可能性も考えられる。

本研究では、対人恐怖の傾向の認知判断傾向に、嫌悪判断としての内容特定性がみられることが示唆された。ただし、嫌悪判断と敵意帰属以外にも、対人場面における否定的な認知には多様なものが考えられ、その他の認知との関連もあわせて今後も広く検討する必要がある。また、嫌悪判断と敵意帰属との間に一定程度の正の関連が見られたことから、両者の共通性と差異についてより精査する必要があると思われる。さらに、対人恐怖と社交不安障害、ならびに、対人不安との異同の問題も残されている。以上の研究を通じて、対人恐怖の認知判断の特徴を解明することは、その理解と治療に有意義な知見をもたらすものと期待される。

1. 従来、“Social Anxiety”は対人不安と訳されてきた。それが、“Social Anxiety Disorder”の日本語訳として社交不安障害が定着するにつれて、社交不安との邦訳も散見されるようになっていく。本研究では、日本語としての自然さの観点から対人不安の用語を用いることとした。

引用文献

- 相澤直樹 (1997). 対人場面における対人恐怖的な悩みの分析 日本教育心理学会第39回大会発表論文集, 548.
- 相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.
- 相澤直樹 (2009). 青年期における対人恐怖の傾向と自己愛的傾向

- を測定する短縮版尺度作成の試み 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **3**, 1-9.
- 相澤直樹 (2011). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒反応について——場面想定法による敵意帰属と嫌悪判断の測定とその妥当性 心理臨床学研究, **29**, 365-370.
- Amin, N., Foa, E., & Coles, M. (1998). Negative interpretation bias in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, **36**, 945-957.
- Beck, A. T. (1976). *Cognitive Therapy and Emotional Disorders*. Madison, Conn.: International University Press.
- Combs, D. R., Penn, D. L., Michael, C. O., Basso, M. R., Wiedeman, R., Siebenmorgan, M., Tiegreen, J., & Chapman, D. (2009). Perceptions of hostility by persons with and without persecutory delusions. *Cognitive Neuropsychiatry*, **14**, 30-52.
- Crick, N. R. & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- Dodge, K. A. and Newman, J. P. (1981). Biased decision-making processes in aggressive boys. *Journal of Abnormal Psychology*, **90**, 375-379.
- Hirsch, C. R. & Clark, D. M. (2004). Information-processing bias in social phobia. *Clinical Psychology Review*, **24**, 799-825.
- Hofmann, S. G. (2007). Cognitive factors that maintain social anxiety disorder: A comprehensive model and its treatment implications. *Cognitive Behaviour Therapy*, **36**, 193-209.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55-65.
- 福井康之 (2007). 青年期の対人恐怖——自己試練の苦悩から人格成熟へ 金剛出版
- 井上和臣 (2011). 認知行動療法からみた病態と介入のポイント 精神療法, **37**, 293-300.
- 笠原敏彦 (2005). 対人恐怖と社交不安障害——診断と治療の指針 金剛出版
- Mansell, W., Clark, D. M., & Ehlers, A. (2003). Internal versus external attention in social anxiety: An investigation using a novel paradigm. *Behaviour Research and Therapy*, **41**, 555-572.
- Miers, A. C., Blöte, A. W., Bögels, S. M., & Westenberg, P. M. (2008). Interpretation bias and social anxiety in adolescents. *Journal of Anxiety Disorders*, **22**, 1462-1471.
- 丹野義彦 (2001). エビデンス臨床心理学——認知行動理論の最前線 日本評論社
- 田中康裕・穂苅千恵・福田周・小川捷之 (1994). 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移 心理臨床学研究, **12**, 121-131.
- 辻悟 (2008). 治療精神医学の実践——こころのホームとアウェイ 創元社
- Voncken, M.J., Bögels, S.M., & de Vries, K. (2003). Interpretation and judgmental biases in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, **41**, 1481-1488.